

図書館と連携した絵本データベース作成の試み

森木 朋佳

The Challenge of Constructing an “ehon database” at Kagoshima Immaculate
Heart College Library

Tomoka Moriki

卒業研究である「こども学研究」において、学内図書館に所蔵されている絵本の一部についてデータベース化しようとした学生の取組みについて報告する。本稿では、大学教育の質的転換、ラーニング・コモンズの設置等、大学図書館を取り巻く環境が変化している今日において、学生の日常的な興味や関心からスタートし、図書館や図書館をより能動的に利用した点に注目した。

Key Words: [学生の取組み] [大学図書館] [資料活用] [アクティブ・ラーニング]

(Received September 24, 2014)

はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻では、「こども学研究」という科目が設置されており、学生4名程度で構成されるグループによる卒業研究に取り組んでいる。本稿では、平成25年度に筆者が担当したグループ中に附属機関である鹿児島純心女子短期大学図書館と連携し、学内図書館に所蔵されている絵本の一部のデータベース化に取り組んだグループがあったので報告する。

図書館の資料を利用して卒業研究を進めることは、普段から図書館の資料を利用したり、図書館を学びの場として利用したりしている学生にとって特別なことではない。ところで田坂は、大学図書館を取り巻く環境の変化として、総合目録データベース方式への移行と横断検索の充実を挙げ、「とりわけ重要なのは、書誌情報の充実と正確化である」(田坂 2006:12)と述べている。そこで本稿では、書誌情報の充実という観点から学生の取組みについて捉え直すことで、より能動的な図書館と図書館資料活用例として考えてみたい。

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

I 学生の取組みの概要

こども学専攻は、保育士や幼稚園教諭を目指す学生が在籍している。「絵本の読み聞かせ」という授業が設置されていることも関係しているのか、学内の図書館を利用する機会も多く、中でも絵本によく触れている¹⁾。図書館の検索システム（OPAC：Online Public Access Catalog）を利用し、絵本を探していた学生の中に、検索システムを利用するには、タイトル・作者名といったある程度正確な情報が必要であることに気づいた学生がいた。図1は鹿児島純心女子短期大学図書館の「簡易検索画面」を参考に、筆者が作成したイメージである。「フリーワード」には、タイトルの一部や作者名を入力することで検索できる。タイトルがはっきりわかっている場合や、同じ作者の絵本を探す場合は、それらの情報がOPACで利用できる資料に関連づいているので、簡単に検索できる。しかし、「はるをテーマにした絵本」や「午睡の前に読み聞かせる絵本」、「ぞうが出てくる絵本」など、絵本の登場人物やテーマといった情報は、書誌情報として資料に関連付けられておらず、それらをもって目指す絵本を検索しようとすることは困難である。Web上の検索サービスを利用すれば²⁾、タイトルや作者名以外の情報を用いた検索が可能であるが、目指す絵本が学内図書館に所蔵されているかを確認するためには、再度学内の検索システムで検索し直す必要がある。

簡易検索画面	
資料区分	全資料（雑誌特集記事除く） 図書 雑誌 視聴覚資料 雑誌特集記事
和洋種別	すべて 和書のみ 洋書のみ
検索対象館	すべて 短大 大学（川内） 大学（隈之城）
フリーワード	中学・高校（学外からは検索できません）

図1 簡易検索画面のイメージ³⁾

ところで、「絵本の読み聞かせ」の授業では、絵本リストの作成に取り組んでいる。実際に保育の現場で利用することを想定して作成しているリストで、読んだ絵本の情報を項目ごとに記入するだけのものであるが、図2のように作者・タイトルといった基本的な情報のほかに、テーマやキーワード、対象年齢などを記入する欄を設けている。

番号	タイトル	作者	テーマ	キーワード	対象年齢
1	三びきのやぎのがらがらどん	マーシャ・ブラウン絵	ノルウェーの昔話 冒険	やぎ トロル	4歳から
2	てぶくろ	エウゲーニー・M・ラチョフ絵	ウクライナ民話 やりとり 冬	てぶくろ かえる ねずみ 動物	3歳から
3	じゃあじゃあびりびり	まついのりこ	音を楽しむ	擬音語 じゃあじゃあ びりびり	0歳から

図2 絵本リスト（記入例）

このリストをエクセル等で作成し、データベース化すれば、絵本の検索が簡単になるのではないか。課題としての「絵本リスト」は、学生一人ひとりが作成しており、記入されている絵本が所蔵されている場所は、自宅であったり、学内の図書館であったり、公立図書館であったりする。学内図書館に所蔵されている絵本を対象に絵本リストを作成して、データベース化することにより、「テーマ」や「キーワード」といった情報からの検索が可能になり、実習準備をする際に役立つのではないかと考えた。そのような視点から研究はスタートした。学生の卒業論文には、学生の思いが以下のように綴られている。

私たちは、幼稚園教育実習、保育実習等を経験し、子どもと絵本がとても近い関係にあることに気づいた。…中略…ところで、絵本は、保育者もしくは大人が子どものために準備することがほとんどである。保育における絵本の役割について考えたとき、給食の後、お帰りの会などで読む絵本は、できれば季節にあったもの、保育者のねがいが伝わりやすいものを読んであげたい。そのような思いで、学校の図書館を利用したとき、蔵書はたくさんあるのに、「すいかが出てくる絵本」、「繰り返し構造の絵本」のように、検索する側のイメージが曖昧では検索しにくいことに気がついた。それは、図書館の蔵書の検索が、「作者」や「タイトル」「タイトルの一部」などでしか検索できないからである。そこで私たちは、自分たちが読みたい、使いたい、子どもに読み聞かせたい絵本が検索できるようになれば、もっと絵本探し楽しく、もっと実習でも活用できるのではないかと思い、図書館の蔵書のうち乳幼児を対象とした絵本をキーワードで分類する方法を開発しようと考えた。(立本、肱黒、吉村、日高 2013: 281)

学生の取組の概要をまとめると次のようになる。

- ① 対象は、学内図書館に所蔵されている絵本とする。
- ② 「絵本」の範囲は、学内図書館において「絵本」に分類されている2638冊とする⁴⁾。
- ③ 日本語で表記された絵本を対象とし、原著が日本語でも外国語に翻訳されたものは含まない。
- ④ 既存の「絵本リスト」に改良を加え、新たな「絵本リスト」を作る。
- ⑤ 絵本リストを改良するにあたっては、佐々木(2000)⁵⁾を参考に、分類方法やキーワードについて検討する。
- ⑥ 学内図書館に所蔵されている絵本を読み、エクセルで作成した「絵本リスト」に入力する。

学生が改良・作成した「絵本リスト」のを元に筆者が作成したイメージを図2に示す。既存の絵本リストを基本としながら、自分たちが検索することをイメージし、項目を追加した。追加された項目は、パターン、季節、お話の長さの3項目である。パターンは、絵本の構造を指し、「繰り返し構造」「繰り返しを含む物語構造」「物語構造」の大きく分けて3つに分類した。また、キーワードは最大5つまで記入できるようにした。

絵本を読み進めるにあたっては、必ず2人1組で進め、特にキーワードについては、両者の意見が合致したものをキーワードとして採用した。

番号	タイトル	作者	絵	パターン	テーマ	キーワード				季節	対象年齢	長さ
1												
2												
3												
4												
5												
6												

図3 改良後の絵本リストのイメージ

研究をすすめるにあたっては、学内の図書館に研究協力を依頼し協力を得た。学生がまずぶつかったのは、「絵本」をどう定義するかであった。また、絵本の読み進めは学内図書館の開館時間に合わせて実施したので、蔵書は常に動いており、学内図書館に所蔵されている「絵本」の冊数を学生が正確に把握するのは難しい状況にあった。以上のような状況を学内図書館に相談したところ、「絵本」の蔵書リストを提供していただいた。蔵書リストの提供によって、「絵本」に分類される資料の範囲が絞り込まれ、対象資料数が明確になった。加えて、提供いただいたリストを台帳とし、読んだ絵本にチェックをつけることで、何度も同じ資料を調査することなく、効率よく読み進めの作業に取り組むことができた。

絵本の調査は平成25（2013）年6月19日から平成25（2013）年11月9日の期間に実施し、学内の図書館に所蔵されている絵本2638冊中800冊⁶⁾についてデータベース化した。

Ⅱ 学生の取組みをどう位置づけるか

学生の取組みの概要については、これまで報告してきたとおりである。データベース化できた資料の数は、学内図書館に所蔵されている絵本の約30%（2638冊中800冊）であり、学内図書館に所蔵されている絵本の半分もカバーできていない。比較対象にするのもためられるが、学生たちが先行研究として参考にした佐々木（2000）の研究では、「子どもの心を理解するための絵本データベース」として、レコード数2820件、6つの大主題、280個の小主題による検索可能なデータベースの構築が報告されている。また、2人1組で読み進めたとはいえ、テーマやキーワードの選定が適切であったか、学生たちが作成した「絵本のデータベース」で検索された絵本は、利用者が探していたあるいは出会いたい絵本とどの程度一致したのか等、妥当性について追求していけば不十分な点が多い。研究としては、まだまだ改善・発展の余地が多いにあるが、ここでは既習の授業からヒントを得て、卒業研究に発展させた点に注目したい。

土屋（2005）⁷⁾や木佐木（2013）⁸⁾が指摘するように、授業と図書館の連携はこれまでも大学図書館における課題のひとつであった。さらに、平成24（2013）年には中央教育審議会答申で、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」と述べられているように、大学教育は質的転換が求められている。このような流れの中で、報告した事例は、「授業において、図書館の資料を利用して卒業研究に取り組んだ」という一般的な

大学図書館の利用に留まらず、授業で経験した「絵本リスト」の作成と情報処理の技術の活用という既習の学習内容と図書館資料を結びつけた取組みであったといえる。

また、学生たちの取組みは、学内図書館に所蔵されている絵本を、作者名やタイトルの一部といった蔵書と結びつけた正確な情報だけでなく、「季節」や「やさしさ」などといったキーワードで検索したいという観点から出発している。この発想は、田坂が『『WEBCAT PLUS』の現時点での最大の利点は、連想検索という新しい検索方法にある』（田坂 2006：186）⁹⁾と指摘する、「連想検索」¹⁰⁾の概念に近いのではないか。絵本のタイトルに「あき（秋）」という言葉が含まれていなくても、実際には秋をテーマにした絵本やその季節にあった絵本は存在する。そのような意味で不十分ながらも学生たちの取組みは、大学図書館に所蔵されている絵本を読み、「タイトル」や「作者」という情報以外に、その絵本に関するキーワードという情報を与えることにより、書誌情報に新たな価値を与えた作業であったといえよう。さらに、学生の多くがスマートフォンを所有し、インターネットの利用や検索することに慣れている状況において、所蔵する資料に対する「多角的な情報の記述」¹¹⁾（伊藤・杉田 2006：67）の必要性を、学生という利用者の立場から学内図書館に提案し、感じさせる取組みであったといえる。

おわりに

本稿では、学生の卒業研究における取組みについて紹介した。取組みの成果としては、学内図書館に所蔵されている絵本の3割程度についてデータベース化したという程度である。今後、学内図書館に所蔵される絵本全てについて同様の取組みが行われ、学内図書館の検索システムと連動させることができれば、「鹿児島純心女子短期大学図書館所蔵絵本データベース」として意味を持つものと思われる。今後も学内図書館と連携をはかり、継続的に取組むことができると考えている。

大学教育における学びの質的転換が求められ、「能動的な学修」への関心が高まっている。それに伴い、大学図書館の新しい形としてラーニング・コモンズが設置されるなど、大学図書館をめぐる環境は大きく変化している。学生たちの取組みは、「図書館に行き、絵本を読む」というとてもシンプルなものであった。大掛かりな設備や大仰なしかけはなかったが、学生の日常の延長にある興味や関心からスタートさせ、自分たちなりの解決策を模索し構築しようとしたという点で、確かに「アクティブ・ラーニング」であった。今回の学生の取組みは、大々的な環境の整備が取りざたされる今日の大学図書館に対する挑戦であったようにも思う。

最後に、忙しい中、蔵書データを提供いただいただけでなく、棚ごとごっそり絵本を抜く行為にも目をつぶっていただくなど、学生の小さな挑戦に快く胸を貸してくださった鹿児島純心女子短期大学図書館とスタッフの皆様にご心よりお礼を申し上げます。

註

- 1) 図書館が実施する多読賞の平成26（2014）年度前期の入賞者は、上位50名中26名がこども学専攻の2年生であった。「絵本の読み聞かせ」の授業では、授業で絵本を用いる他、絵本

100冊を目標に絵本リストの作成を課題のひとつにしており、学生の利用数も増加したと考えられる。

- 2) 例えば絵本ナビでは、年齢や「秋を感じる絵本」「どんぐりの絵本」など、テーマや季節などのカテゴリから絵本を検索できるようになっている。
- 3) 鹿児島純心女子短期大学図書館ホームページ、「蔵書検索 (OPAC)」, 簡易検索画面を参考に筆者が作成。実際の画面とは多少異なる。
<http://www.k-junshin.ac.jp/juntan/libhome/> (accessed 2014-9-24)
- 4) 鹿児島純心女子短期大学図書館では、日本十進分類法第9版に基づいて資料が分類されており、「絵本」は「726.6」の分類記号を持つ。
- 5) 佐々木 (2000) は、絵本心理学の構築を目指し、「どのような主題がどのような人間関係や環境設定のもとに描かれているか」(佐々木 2000:27) について、主題や内容によって絵本を分類し、絵本のデータベース作りを行っている。
- 6) 図書館から提供のあった資料によると、平成25 (2013) 年6月12日現在の絵本の蔵書数は2510冊である。平成25 (2013) 年11月9日では、2638冊となっている。
- 7) 土屋 (2005) は、「学生のほとんどが図書館にこないという現実が存在した。… (中略) …しかしこの象徴的な例からは、大学改革が求める教育の実施が図書館との密接な関係なしには不可能であることを認識することが重要である」(土屋 2005:26-27) と指摘している。
- 8) 木佐木 (2013) は、大学での授業と大学図書館が所有する資料が結びつきにくい現状について「現在の大学の正課教育と図書館の連携の弱さという現実」(木佐木 2013:9) と指摘している。
- 9) WEBCAT PLUSについては、情報学研究所のサイトに、「Webcat Plusは、国立情報学研究所 (NII) が提供する無料の情報サービスで、江戸期前から現代までに出版された膨大な書物を対象に、そこに記憶された知の集積を自由に探索できる思索空間の実現を目指しています。全国の大学図書館1000館や国立国会図書館の所蔵目録、新刊書の書影・目次DB、電子書籍DBなど、本に関する様々な情報源を統合して、それらを本・作品・人物の軸で整理した形で提供しています。現状、データの精度はまだ不十分ですが、将来的には、ウェブ上に確かな知識の基点を提供する公共財としての情報サービスを目指します。」と説明されている。
<http://webcatplus.nii.ac.jp> (accessed 2014-9-24)
- 10) 連想検索についても、「連想検索とは、文書と文書の言葉の重なり具合をもとに、ある文書(検索条件)に近い文書(検索結果)を探し出す検索技術です。平たくいえば、使われている言葉の集まりを手がかりにした仲間探しです。あなたが選んだ言葉の集まりをたよりに、1000万冊以上の膨大な本の中から、あなたの関心に近い本を探します。」と説明されている。
http://webcatplus.nii.ac.jp/faq_002.html#pid001 (accessed 2014-9-24)
- 11) 伊藤・杉田は、メタ・データベースの構築について「情報の電子化がもはや一般化している今日では、同じ内容の情報資源に対する複数の異なるバージョンの存在、コレクションの一部と同一のコレクションに含まれる他の情報資源との関連性、独立して存在するあ

る情報資源の部分間の関連づけなど、多角的な情報の記述が必要となっている。」と述べている。

文 献

- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」平成24年8月28日。
絵本ナビホームページ <http://www.ehonnavi.net> (accessed 2014-9-24)
加藤信哉・小山憲司編訳(2012)『ラーニング・コモンズ 大学図書館の新しいかたち』, 勁草書房。
木佐木和代(2013)「図書館のラーニング・コモンズ化と学生にとっての居場所の共存の課題」『九州地区大学図書館協議会誌』第56号, 6-10頁。
逸村裕・竹内比呂也編(2005)『変わりゆく大学図書館』, 勁草書房。
佐々木宏子(2000)『絵本の心理学 子どもの心を理解するために』, 新曜社。
田坂憲二(2006)『大学図書館の挑戦』, 和泉書院。
立本しおり・肱黒柚佳・吉村京華・日高祥子(2013)「乳幼児を対象とした絵本の分類方法の開発」, 『こども学専攻卒業研究 こども学研究 平成25年度』, 279-295頁。

